

## 体育会運動部に所属する学生アスリートの活動継続と心理特性

### A study on psychology characteristics of athletes of college sport teams

1K06B113

指導教員 主査 作野誠一先生

嶋 沙織

副査 内田直先生

#### 1, 緒言

某大学陸上部員による痴漢騒動、大麻栽培・吸引と遺憾に思う事件が世間を賑わせた。彼らにこのような反社会的行動を起こさせたものは何だったのか。

一方、体育会独特の規律に苦しみながらも厳しい練習に耐え、無事に引退をした選手達もいる。今日まで彼らを支えてきたものは何だったのか。また、そこから何を学ぶことが出来たのか、に興味を持ったのが本研究に至った経緯である。本研究の目的は無事引退まで続けてこれた選手達が何に苦しみ何を支えに競技を続けてきたのか、また体育会組織に所属したことで何を心得、どのような自我形成を遂げることができたのかを明らかにすることである。

#### 2, 研究方法

今年退部をした学生アスリートへの対談インタビューの形をとった。質問項目は

- ・いつからその競技を始めたか
- ・なぜその競技を始めたか
- ・なぜサークルではなく体育会組織での競技継続を選んだのか
- ・体育会組織に慣れるまでどれくらいの時間を必要としたか
- ・所属する体育会組織の中でこれ必要ないだろうと感じた規則はあったか、あるとしたらその内容はどんなものか
- ・(中学)高校、大学と競技を辞めたい、または競技は辞めたくないが体育会組織(部活)を辞めた と思ったことはあるか、あるとしたら

その理由は何か

- ・辞めたいと思っても引退まで続けてきた理由は何か
- ・体育会組織に所属している間体に起こった障害はあるか
- ・自分が所属したことで部にどのような影響を与えたと考えるか
- ・体育会組織に所属したことで自分にとってプラスに作用したこと、マイナスに作用したことは何か
- ・引退をして自分の中で変化はあったかの以上 11 項目である。

#### 3, 考察と課題

体育会組織が所属アスリートに与える苦しみとしては

今までに自ら確立した「競技をする自分はこういうものであるか」、「なぜ自分は競技をするのか」という自己概念が覆されることによる危機感

所属組織それぞれに存在する組織文化に基づく規則によって自由を奪われ自分の行動を限定されることによる不満

期待を背負わされることから生じるプレッシャーがあることが参考文献およびインタビュー調査によって分かった。その苦しみ乗り越えるための要因として一番興味深かった回答が「結果を出せた時にその競技の楽しさや競技が好きでやっているという気持ちを再認識するから」である。体育会組織に入ったら競技に対する「好き」という気持ちは忘れがちになると筆

者は思っていたが、意外にも危機に直面した時にこそ原点に戻って自分と競技の関係を見直す選手がいるということが本研究で明らかになったと考える。これらの理由を支えにして競技続行への危機を乗り越えたことで「困難が生じても自分なら乗り越えられるという自信がついた」ことは選手の同一性達成に大きく関わっていると思われる。また、「引退をして自分の中で変化はあったか」という質問に対しては達成感、喪失感、後悔の3つに分かれ、達成感だけでは終われない選手が多いという結果になった。これは長年自分の生活の一部であった競技が終わってしまったことでまだ気持ちの切り替えがうまくいかない事が考えられ、選手達はモラトリウム期として今後の未来に向けて新たな自己を問うことが課せられていることが分かる。

しかし自ら危機を乗り越えられない選手に対してどうしたらそれを乗り越えるための精神的強さを与える事が出来るのかはまだ解明出来ない。危機を自覚して対処していく姿勢を身につける必要があると筆者は考え、今後の課題として提示する。